

## イギリス帝国の黄昏と東南アジア人

——東南アジア史学会・関東例会（2001年5月）より——

山本博之（東京大学）

近年、イギリスの公文書公開 30 年規則によって関連史料が利用可能になったことを受け、マラヤ連邦の独立やマレーシア結成に関する研究の進展が著しい。その一翼を担う鈴木陽一氏（上智大学大学院）の研究成果<sup>1</sup>の一部が、2001年5月26日に行われた東南アジア史学会の関東例会<sup>2</sup>において「グレーター・マレーシア、1961～1968：イギリス帝国の黄昏と東南アジア人」と題して披露された。

\*

鈴木氏が解明しようとしたマレーシアとシンガポールの「謎」とは、その対照的な国家のあり方にある。両者はもともと長い歴史の中で一体性のある存在であり、しかもその住民は外部世界との繋がりを活かして生きてきた。したがって両者は当然一体となって国づくりを進めることが予想されるが、現実には別々の国となっているだけでなく、多数派民

族の優位と多民族主義という正反対の国是を掲げている。なぜこれほどまで異なる 2 つの国が生まれてしまったのか。

鈴木氏は、この謎を解く鍵が 1961～1968 年にあると見る。1961 年とはグレーター・マレーシア構想が提唱されて脱植民地化の過程が開始された年である。そして 1968 年とはイギリスがスエズ以東の完全撤退を発表した年であるが、これはシンガポールでは多民族主義を掲げる人民行動党(PAP)が政権基盤を固め、他方マレーシアでは翌年の人種暴動を経てマレー人優位の体制が確立する前夜であった。したがって 1961～1968 年とは、イギリス人によって提唱されたグレーター・マレーシア構想がイギリス人の撤退とともに終焉を迎え、かわって両国が現在の国家体制に向かいつつあった時期であると言える。

\*

1961 年、自らの主導によるイギリス帝国の再編をめざしたイギリスは、マラヤ・シンガポール・ボルネオよりなるグレーター・マレーシア構想を提唱した。これは、連邦制をとることで各邦の親英派に実権を与え、独立後もイギリスの影響を残そうとするものだった。構想の実現には多くの困難があったが、シンガポールの共産化を避けたいイギリスの強力な介入によってマレーシア結成が実現した。

しかしイギリスの関与が低下するにつれて親英派が連邦内で行き場を失い、シンガポー

1 関連テーマについての鈴木氏の研究成果として、「マレーシア構想の起源」（『上智アジア学』第 16 号、1998 年、151～169 ページ）および国際大会での報告（“The Origins of Southeast Asian Regional Cooperation: Local Initiatives and Anglo-American Cold War Strategies”, The 16<sup>th</sup> Conference of the International Association of Historians of Asia (IAHA), July 2000）がある。また、本報告のもととなった論文として「グレーター・マレーシア、1961～1967：帝国の黄昏と東南アジア人」（『国際政治』第 126 号、2001 年 2 月、132～149 ページ）がある。

2 東南アジア史学会の各地区例会についての情報（および過去の例会の記録）は、東南アジア史学会ウェブサイト<<http://www.soc.nii.ac.jp/jssah/>>で閲覧できる。

ルが切り離され、ボルネオはマラヤ化された。イギリスという後ろ盾を失ったマレーシアとシンガポールは ASEAN に加わり、ASEAN 内のパートナーとなった。

統合構想を基本的に方向付けたのはイギリスの冷戦戦略であり、実現の過程で統合構想の内実を変容させていったのは同構想に対する東南アジア人の対応のためであった。

\*

以上の報告要旨を踏まえ、ここでは「東南アジア人」に込められた意味を検討したい。これは、いったん統合されたマレーシアとシンガポールがわずか 2 年後に分裂したことを失敗と見るのかという問いと関係している。

連邦結成や分離独立をイギリスの帝国政策に対する東南アジア現地人の対応の産物ととらえ、東南アジア現地人が相互に相手との関係の結び方を模索した過程として見ている鈴木氏は、シンガポールの分離を失敗とは見ていない。すなわち、彼我の間の国境線を完全に取り払う方向で共同体を作ろうとするのではなく、逆に国境線を高くして相手との関係を断つのもなく、相手との間に適度の高さの国境線を挟むことによって安定的な関係を築こうとする試みである。連邦結成や分離独立、そして ASEAN 結成は、いわば国境の高さを調節してきた過程なのである。そしてその試みの 1 つである ASEAN は、今や東南アジアのほぼ全域を覆うに至っている。

つまり、「東南アジア人」であることはマレーシア人やシンガポール人であることを否定するものではなく、マレーシア人やシンガポール人であることと「東南アジア人」になる

ことは互いに強めあう関係にあると理解される。鈴木氏が「東南アジア人」を用いたのはここまで含んだ上でのことであろう。

民衆の解放を国民形成に結び付けて捉えるナショナリスト史観では、現代史が国家単位で書かれることは避けられない。本報告はこれに対する異議申し立てであると同時に、1 つの解決方法を提示したものでもある。

\*

本報告で強調すべきもう 1 つの点は、イギリスは現地人指導者の突き上げに対して主導権を維持するために先回りせざるを得ず、実際にはイギリスが大幅に譲歩して独立を与えることになったという論点である。言うまでもなく、これはマラヤの独立やマレーシアの結成は交渉を通じてイギリスが与えたとする従来の一般的な理解に対する批判であり、極めて重要な指摘である<sup>3</sup>。

鈴木氏も指摘しているように、全てをイギリスが決定したのではなく、現地人指導者とイギリス人がともに相手を利用しあっていたと見るべきだろう。もっとも、従来の研究では現地人指導者といえば親英派が多く扱われてきたため、それらにばかり依拠すれば必然的に協力関係が強調されることにもなる。表立って反抗しないまでも非協力的だった人々はどのような役割を演じたのか、英語文献にほとんど登場しない非親英派を掘り起こす作業が我々の今後の課題である。

---

<sup>3</sup> マラヤ連邦の独立に関して、木畑洋一氏も『帝国のたそがれ：冷戦下のイギリスとアジア』（東京大学出版会、1996 年）の第 2 部において同様の指摘をしている。